



シーカー 4

ALPHAT

安部飛翔
Hisyou fbe



アルファイト文庫 

主な登場人物

スレイ

本編の主人公。18歳。
シークレットウェポンの
双刀を操る最強剣士。
二つ名は「黒刃」。

イリナ

兎竜帝国の第一皇女。19歳。
過去にスレイと勝負をして
引き分けた。

更科真紀

異世界から現れた美少女剣士。
18歳。好戦的な性格で、異世界
三人組のリーダー格。

フルール

真紀達をこの世界に
導いた汎次元竜。
次元を超える
能力を持つ。

ディザスター

EX+級の力を誇る“欲望”の
邪神。蒼く滑らかな毛並みを
した狼の姿。

イリュア

ヴァレリアント聖王国女王。
19歳。ヴァレリア教の
最高司祭「聖王」でもある。

サイネリア

ヘル王国を統べる「魔王」。
215歳。闇の種族の頂点に
立つ存在。

アルス・クロスメリア

クロスメリア王国国王。55歳。
三つのシークレットウェポンを
操る称号：勇者。

1

会議の開始が宣言されると同時に、出席者達の放つ視線の圧力が強まった。ゲツシュ・アルメリアは中指で眼鏡を押し上げ冷静を装いつつも、ドツと冷や汗を流す。

ゲツシュとて探索者ギルドのギルドマスターの地位にある身。器も大きく、責任感も強く、見識も広く、公平な目で人を見る眼力も有る。人の上に立つ気概きがい、それに見合った判断力、決断力、実行力といった能力も備えている。権威けんいもそれなりのレベルだ。

ただ、ここに集う面々とは比べ物にならなかった。

既に伝説の領域に足を踏み入れている者。各地で英雄とされる者。辺境の民の間では信仰の対象にさえなっている者。未知なる力を持ち、人々と敵対してきた者。老獪ろうかいで油断のならない者。そして何より、ゲツシュを今の役職に任じたその人も居る。

ゲツシュ自らが声を掛けこの場に彼らを集めたとはいえ、その中心で舵取りかじりをするのは荷が重い。あまりのプレッシャーに胃がキリキリと痛む。

ふと、ここ最近のストレスの原因である、黒刃くろやいば、スレイに視線を向けてみると、ゲツ

シユは思わず脱力してしまった。

スレイの実力は折紙付きだが、錚々たる面子が一堂に会したこの状況下では最も場違いな存在である筈なのだ。それなのに、彼は呑気にも、王城の侍女を口説きつつ優雅にお茶を飲んでた。

侍女は軽くあしらっているが、スレイはいっこうにめげる気配が無い。寧ろ、必ず口説き落とすと言わんばかりの楽しそうな表情だ。

ゲツシユと同じく、それを見た殆どの者達は嘩然として、「こいつは何者だ？」という顔をしている。

ここまでスレイに同道してきた女性陣は、皆キツイ表情だった。唯一の例外は、白姫、サクヤ・シユテンで、男達と共に苦笑している。

ゲツシユは、「スレイはいったいどれだけ大物なのか」と呆れてしまう。そのおかげで幾分緊張が薄れたことには感謝したが、尚も強烈なプレッシャーを感じずにはいられなかった。

「まずは自己紹介をして、情報を共有する場を設けたいと思いますが如何でしょうか？」スレイは侍女を口説きつつ、ゲツシユの発言に対する皆の反応を窺う。

反対する者はいないようだ。まあ予想通りといったところか。

この場に集う面子が皆、この世界に於いて最高クラスの重要人物であることは間違いない。そんな彼らを、スレイは自らを加速した上で、まずは独断と偏見で評価しようと考えていた。

加速することで、主観的に時間を無視してゆつくりと、相手を観察できる。

その際重要なのは、加速を誰にも悟らせないことだ。

加速時に相手を害し得る何らかの要素があれば、この場に居る超一流の探索者達は皆、無意識のうちに反応するだろう。よって、加速する際はその危険性を完全に排除する。

通常、強大な力の持ち主が人を害する可能性を完全にすることはできない。何ら特別な力を持たない一般人でさえ、知らず知らずのうちに他者に害を与えることはままあるのだ。

だが、自分ならできるとスレイは確信していた。人を害する可能性を完全に排除できたなら、さながら息をするように、ごく自然に、何者でも殺すことが可能となる。まあその技術を自慢しても微妙であるし、スレイの戦闘欲の高さからいって、暗殺という手段はあり得ないが。

勿論、敵を正面から殺すのに躊躇は無い。何故なら、スレイに敵対するという道を選んだ時点で、その者は自ら死を選択したに等しいからだ。

他人の命の使い途をとやかく言うつもりはない。他人の生死を決定するような地位に就

こうとも思わない。

スレイは幼少期より書物に埋もれた日々を送ってきたので知識は豊富だ。それだけに止まらず、最近では実践的な経験の断片すら「識る」ことがある。

よって戦術・戦略だけでなく、政治から謀略まで対応できる自信はあった。だが、もし自分が人の上に立ち組織や軍を率いるとなれば、駒を動かして敵を倒したりはしない。

戦闘に於いても謀略に於いても、味方の人間を怪我一つさせず無力化し、必ず自分一人と敵全てが戦う場面を作り上げ片付けてしまおうだろう。

そういう人間がトップになるなど、普通の組織や軍では有り得ない。

そんな戯れのような思考をしているとゲツシユの声が響き、スレイは気持ちを切り替えた。

「それでは最初に、我が探索者ギルドの代表として参加しているメンバーを紹介させて頂きたいと思います。まずは私、ギルドマスターのゲツシユ・アルメリアと申します」

ゲツシユによる紹介が始まった。早速スレイは自らを加速し、相手を測ることにする。

探索者や人外の種族の者達を見る際、重要視すべきはその技量と経験だ。

それ以外の能力は基礎に過ぎない。そう、ステータスなど駆け引き次第で覆せるのだから

らどうでもいいのだ。

まずゲツシユ。彼はこの場ではさほど目立たないが、器の大きい男だった。

偏見や差別などとは無縁の人格者でもある。申し分の無い人間性だが、強烈な個性が無いことが物足りない。

続いて、刀神、クロウ・シユテンとその妻サクヤが紹介されると、驚きの声が上がった。探索者ギルドはこれまで、二人の生存を秘匿してきたからだ。

クロウとスレイは既に刀を交えた仲である。彼らにとって、戦いは何よりも雄弁な会話となる。故に、出会ってからまだ間もないとはいえ、すでに深く知り合っているに等しかった。

クロウは刀術の技量も確かだが、何よりその圧倒的な経験量に於いて、若い者達と格が違う。

クロウの「実力」は、この場で限りなくトップに近いだろう。

スレイはクロウの刀術の全てを見たとも盗み切ったとも思っていない。再び戦う機会があれば……と楽しみにしているくらいだ。

だが今は、先日クロウと刀を交える寸前までであった、燃えるような闘志が湧き上がってこない。その理由は単純で、戦えば必ず勝つという確信を既に得てしまったからだ。

先の戦いに於けるスレイの最後のカウンター、あの一撃で、自分がクロウという剣士を

完全に超えた——その絶対的な手応えを得てしまったのだ。

たとえ己より強い相手と戦おうとも、自分が常に勝利する——スレイはそこを譲るつもりは無い。だがクロウに関しては、最早そのレベルの相手ではないのだ。そこに僅かばかり寂しさを感じた。

一方、サクヤについてまず思うのはやはり胸が無いな、ということであった。

サクヤとは直接戦っていないので良く分からないが、クロウやマリーニア、ケリー姉弟の様子から察するに、サクヤは怒らせるとかなり怖いらしい。

しかしこれも、スレイにとればからかい甲斐があるということになる。

ただ、サクヤは相当な美少女とはいえず所詮若作りの年寄りで、どの道クロウの女という事情もあり、そこまで興味は湧かない。サクヤが魔術師として超一流であることは間違いないが、総合的な実力では明らかにクロウより下だ。

次にケリーが紹介されると、クロウの弟子ということで多少の注目を集めたが、それもすぐに収まった。当然だろう。ケリーは将来性こそあるが、現時点ではあまりに力不足だ。スレイは旅の道中、刀術やデリラク刀など共通の趣味の話題でケリーと打ち解けはしたが、それでもまだ友人と呼べる程では無い。

ちなみに、ケリーの持つ「桜花」と「散葉」はデリラク刀の中でも格別の業物である。

ヒヒロカネ製のデリラク刀は全てが名刀とされ、大陸での取引価格は破格の高値だが、

ケリーの刀に到っては値を付けることすら難しいだろう。

彼の姉、マリーニアが「星詠」という二つ名の持ち主としてゲッシュから紹介されると、場が大きく沸いた。

皆、二つ名に反応したので。「星詠」とはそれだけ大きな意味を持つ。

数年前——まだ大陸中央の中小国家群で戦争が頻繁に起きていた頃、大陸全土に影響を持つはずの聖王が発する和平の言葉にすら、誰も耳を貸さなかった。その背景には、戦争を金儲けの道具とし、死の商人と呼ばれる下種な連中の暗躍があったと言われている。戦乱が収まった今でも、その残党は裏の世界に潜り込み、相当数の大きな裏組織と繋がりを持っているらしい。それは大陸の巨大な闇の部分だ。尤も、そのような輩を闇などと呼べば、本物の闇の種族から「一緒にするな」と抗議の声が上がるだろうが。

彼らが荒稼ぎする一方、戦争に次ぐ戦争で中小国家の財政は破綻しかけ、このまま全ての国が共倒れすると思われた折、聖王からの要請で探索者ギルドが動くことになった。

とはいえ、肝心のSS級相当探索者達の殆どが戦争に加担、或いは自国に籠っていたため、探索者ギルドが動員できるのはせいぜいS級相当探索者まで——そんな状態で介入したところでいったい何ができるのかと、多くの国は懐疑的であった。

だがその後、結局僅か一年程で中小国家群の戦争は収まった。その時に活躍したのが、当時十代半ばの少女だった「星詠」なのだ。

彼女はあらゆる戦争の火種を先読みして叩き潰した。中小国家の首脳陣の不祥事などを利用して勃発寸前の戦争を悉く阻止したのである。

そればかりか、暗躍する死の商人達の所在まで突き止めた。『星詠』のお陰で、探索者ギルドの介入が効果を上げたと言っても過言ではない。

今では中小国家間で表立った戦争は無くなった。あつたとしてもせいぜい裏での抗争や、闇の種族であるヘル王国との小競り合いが起きる程度だ。

故に『星詠』マリニアの存在は、ここに居る強者達にとってさえ特別な意味を持っていた。

だがそれとは別の意味でも、スレイはマリニアを上げしげと眺めずにいられない。

彼女はやはり、神秘的でいながら色香を漂わせるいい女だ。紫の色合いの服装がそれをグッと引き立てている。

スレイはマリニアに嫌われているようだが、彼女に男の影は無さそうなので、いずれ必ず口説き落としてやろうと心に誓っていた。

マリニアは、戦いの相手としては実力不足である。だが彼女が持つ占術の特性は、スレイが自らの内に持つものと近い何かを感じさせる。全知の欠片、人の可能性、その一端の発現といったところだろうか。

そう考えると、マリニアは女としても探索者としても興味深い相手である。

続いて更科真紀、神代出雲、セリカ・J・スミス、フルールの紹介が始まった。

当然、場に困惑した空気が広がる。彼女達が異世界の勇者でありフルールは時空竜だと告げられても、話が突飛に過ぎるのだ。

まああの本人達は、周囲の様子などさして気にも留めていないが。

スレイが再び加速しようとした瞬間、肩に乗る小竜——フルールが悪戯っぽい表情で視線を向けてきた。足元に居る狼に目を移すと、同じようにこちらを見上げています。

スレイは僅かに嘆息した。やはりこいつらには自分の隠蔽が通用しておらず、加速を繰り返していることもバレているようだ。さて、と気を取り直すスレイ。

まずは真紀だ。上品で清楚なお嬢様然とした外見だが、色気は充分にある。そして、風貌に似合わぬ野獣のような内面、激しく情熱的な一面が、真紀の魅力をよりいっそう引き立てていた。

彼女の刀術は長年積み重ねられた歴史を窺わせるが、戦闘相手としては、その技量に不足を感じざるを得ない。表面的に見れば真紀はクロウより能力が勝っているだろうが、総合力では経験不足故に、クロウには及ばないだろう。

ただ、何か引つ掛かるものがあることは確かだ。まだ底を見せていないような……これは残りの二人からも受ける感覚だった。

出雲は小柄で可愛らしい美少女だ。ただし性格が読めない。あまりに掴み難い性格なの

で、何をやらかすかさつぱり分らない。

戦闘相手としての出雲は実に興味深い。なにせ異世界アラストリアの魔法体系を全て、それも相当な短期間で極めた大魔導師なのだ。

そして、女としても戦闘相手としても「読めない」というのは、スレイには魅力的である。

三人目のセリカは、真紀や出雲とお揃いの制服には収まりきらない程の、かなり健康的な肢体の持ち主だ。普段から底抜けに明るい性格をしているが、色事になると途端に純情となってしまう。

だがそのギャップが堪らない、とスレイは思う。あの身体が全て自分の物だと思うと最高だ。

戦闘相手としては……と、魔導銃なるものを思い浮かべてみるが、まだよく分らない。だがそれも含めて「読めない」というのは、やはり面白い。

最後にフルール——実に愛らしい姿をしている。まあこれがフルールの真の姿では無いと分かっているのだが。

フルールに備わる力は常識の域外にある。下級邪神と同等の力なのだが、そもそも規格が違う。

そんなフルールではあるが、戦えば必ず自分が勝つとスレイは確信している。ただ同時

に、戦うことは断じて無いだろうとも思う。これだけ懐かれていればな、と苦笑を漏らすスレイ。

スレイが加速をやめ世界が再び動き出した途端、周囲からゲツシュに向かって、一斉に猜疑の視線が向けられた。

「皆様がお疑いになるのも当然かと思えます。しかし彼女達が異世界から来訪したというのは、星詠がその占術の力を以って確認し、事実だと判明したことです。そして彼女達は間違いなく、ここにお集まりの方々に勝るとも劣らない強大な力を持っています。必ず我々の戦力となってくれろと思ひ、私の一存で、この場に同席させています」

依然として一同は懐疑的だったが、マリーニアの占術によって認められたことなのであれば……と落ち着いていく。

だが、ゲツシュにとつて一番の問題はここからだつた。

「続いて紹介いたしますのは、市井のS級相当探索者、黒刃、スレイです」

呼ばれたスレイは自然体で立ち上がり一札すると、無造作に席に座り直す。その際、フルールが落とされないうように右肩にしっかりとしがみついていたので、どこかコミカルな印象が漂つた。

「市井のS級相当探索者」と紹介されても、皆は場違いな印象しか受けない。更に、「異世界から来訪した汎次元存在である時空竜」と紹介されたフルールが寄り添っているのも

一同の関心を駆り立てた。

と同時に、既にスレイを知る者達は、ひどく意味ありげな目で見つめている。

しかしスレイは、自分に向けられた様々な視線をものともせず、悠然とお茶のお代わりを侍女に頼み、隙を見ては口説こうとしていた。

その泰然とした様子に、「こいつは場の空気も読めない大馬鹿なのか、それともそんなものを気にする必要すらない大物なのか」と周囲の視線が困惑の色に変わる。

「二つ名持ちとはいえ、ただの一S級相当探索者を連れてきたのは何故か。皆さん疑問にお思いでしょう。私とて、とある理由が無ければそうしませんでした。まず、事前にお報せした通り、今回この会議が設けられたのは、邪神が一部とはいえ復活し、封印が解けかけていると判明したからですが……実は、その邪神の一部たる分体を葬り去った探索者が彼、スレイなのです」

途端、どつと場が沸いた。

「皆様！ ご静粛に!! これは、星詠、マリニアも確認した紛れも無い事実です。間違

いなく彼が邪神の分体を倒しました。ですが、それだけではありません!!」

ゲッシュの言葉にも拘わらず、なお一同は騒然としたままである。

「続いて、これもまたマリニアが確認し、事実と判明していると前置きさせて頂きます。実は今より二年以上も前に、別の邪神が既に復活していました。人の輪廻転生の輪に入る



という手段で、勇者様達の封印から逃れた邪神——その名はロドリゲーニ。スレイはロドリゲーニの転生である人間と、かつて幼馴染の関係だったそうです。そして彼は、覚醒したロドリゲーニを倒す為に探索者になった——」

今まで以上に広間が慌しくなる。

「ちなみに、スレイがS級相当探索者ということで、彼の実力を軽く見たり、彼に倒された邪神の分体の力を過小評価する方がいらつしやるかもしれません。そこで予め申し上げます。スレイは私達の目の前で、刀神、クロウと戦い、勝利しています」

クロウがゲツシユの言葉を受けて口を開く。

「うむ。そのスレイと戦い、儂が負けたのは事実じゃ。先に言っておくが、儂は手加減など欠片もせんかったぞ？ 率直に言つて、スレイは圧倒的に強かった」

皆が驚きを隠せない状況のなかでも、スレイは侍女にちよっかいを出すのをやめない。さすがに周囲の視線が胡乱なものになっていく。

最後に、ゲツシユは今まで以上に声に力を込め、強い決意を以つてその同道者を紹介する。

「そして、スレイの足元に待る蒼い狼。彼は紛れも無くスレイのペットなのですが、その狼の正体は、欲望の邪神、ディザスターなのです」

静まり返る面々。スレイは一面倒臭い事態になりそうだと感じて、ディザスターを窺い

見た。

シャープな肢体と着い毛並みが峻烈なまでに美しい狼。この気高い狼が、自分だけには可愛らしく甘えてくるのだから、飼い主冥利に尽きる。しかも修行の手助けまでしてくれるのだ。

出会つてすぐに一戦を交えた時は、スレイは勝利を譲られたも同然で、実際は圧倒的な力の差があった。

尤も、最後に勝つのは自分だとスレイは確信している。

何故なら、相手が何者でどんなに力の差があろうと、戦う以上は常に「俺が勝つ」と決めて、いるからだ。たとえ命を懸けることになったとしても、ほんの刹那でも相手を先に殺し、勝利を確定させてからでなければ死なない。

しかしまあ、こいつと戦うことももう無いのだろうな、と苦笑するスレイだった。

周囲からはまたしても、「何を言っているんだ？」と非難の視線がゲツシユに注がれる。哀れむような表情の者まで居る。

そんな空気を讀み、スレイに目で合図するゲツシユ。それを受けて、スレイは仕方なくディザスターを円卓の上に乗せ、耳元で何事か囁いた。

スレイは思う。ディザスターが邪神であると証明する相手は、今のところ一流の探索者や戦闘種族だけで構わない。他の者達は、自らの傍に在る実力者を信頼し、その言を信用

するだろう。だから、最低限の人数に絞って問題無い。

依然としてディザスターとスレイに対し、多くの馬鹿にしたような視線が向けられている——が、次の瞬間、先程までとは違う真の意味での静寂が訪れた。

一部の者はキョトンとしている。だが、実力の高い者の反応は皆一様で、ただ静かに、ディザスターをじっと見つめていた。

ディザスターはスレイの指示のままに自らの力を制御し、邪神であると示すべき相手に対してのみ、プレッシャーを放っている。

その圧倒的な波動に、対象者となった誰しもが身構えた。

神々によってプログラムされたままに、恐怖の感情を麻痺させ自ずと戦闘モードに移った彼らだったが、その表情は驚愕で歪んでいる。

スレイはそんな者達の様子を気にも留めず、またもお茶のお代わりを侍女に頼んだ。

彼女も困惑しているはずだが、それでも職務を忠実に遂行しようとする。美人な上に仕事もデキるその姿は、実に魅力的でいい女だった。やはり口説き甲斐がある。

やがてディザスターがプレッシャーを止めると、大きなざわめきが巻き起こった。

「静粛に!! 皆様、静粛に!!」

ゲツシユが何とか鎮めようと声を張り上げるも効果は無い。実力者達のディザスターを見る目が、警戒と畏怖と困惑に取って代わっていた。それは、面白いまでの豹変ぶり

だった。

「スレイくん、君はいつたいディザスターに何を言ったのかね？」

ある程度皆が落ち着きを取り戻すと、ゲツシユはスレイを問い質した。

当のスレイはティーカップを傾けつつ、お茶菓子を摘んでいた。ちなみに、スレイの肉体は既に通常の人間とは異なり食事が必要ない。つまり、全く飲食しなくても不都合はなく、逆にどれだけ飲食しても太らないという便利な肉体だった。

ゲツシユの問いかけを無視し、スレイは侍女を口説き続ける。

ただ黙々と仕事をこなす彼女は、まさに雇われ人の鑑と言える。だが少しずつ、スレイの口説き文句に頬を染めるようになってきていた。

よし、これは何としても今日中に口説き落とす、と決意するスレイ。

そんな態度に、流石のゲツシユも怒りを隠せず、こめかみに青筋を立てて詰り寄ってきた。

「スレイくん! 君はいつたいディザスターに何を言ったのかね、と聞いているんだが?」

スレイは肩を竦めると、あつさりとうろ答えた。

「『ここに居る分からず屋どもに、少しお前の力を見せてやれ』。そう言ったただけだが?」
平然としたスレイに、最早諦めの境地に到るゲツシユ。

やがて場は落ち着きを取り戻し、会議を再開できる状態に戻った。

一部の者達はディザスターに対する警戒心をぬぐい去れないままのようだったが、それも仕方あるまいとゲツシユは思った。

しかしディザスターがスレイに甘える姿は、どう見ても主人に甘えるベットのそれなのだ。スレイの右肩に乗っているフルールもまた同様で、先程の出来事は夢だったのではと思わせる。

ゲツシユは、ゴホンと咳払いをして告げた。

「えー、アクシデントもありましたが、我ら探索者ギルドの代表の紹介は以上です。それでは次に、ホストであられるこの城の主、アルス陛下とそのご息女であられるカタリナ殿下、そして臣下の方々のご紹介をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ああ、構わないよ」

ゲツシユが座ると入れ替わりに、アルスが立ち上がった。

「それではまず、私から自己紹介をさせてもらおう。私はアルス・クロスメリア。このクロスメリア王国の国王であり、称号・勇者だ。故に、勇者王^{ユウジョウ}などと過分な二つ名で呼ばれることもあるね」

落ち着きのある、にこやかな表情でそう告げるアルス。

スレイは速やかに自己を加速する。先程からアルスの意味ありげな視線がやや気になっ

ていたのだが、まあ考えていても仕方無かろう。

観察し始めてすぐに抱いたのは、なるほどこれは本物だ、という素直な感心だった。

アルスは純粹な剣士ではなく、剣と盾を用いた戦闘術が主体のようだ。

その立ち姿や重心の置き方、肉体のバランスなどから推測するに、本物の技量の持ち主だということが分かる。戦闘方法こそ違えど、実力はクロウにも劣るまい。

何よりアルスは、究極^{アルテマ}級のなかでもかなり上位のシークレットウェポンを三つも有している。そのどれもが驚くべき効果を持つ武器であると、一目で知れた。どのような戦闘効果があるのかは、後々の楽しみが薄れるので推測しなしておく。

アルスは探索者として超一流の領域すら超越している。為政者としての優秀さは分からないが、その圧倒的なまでの威風、輝きは多くの人を引き寄せるはず。まさに王道を行く男だ。

これはまた色んな意味で楽しめそうな好敵手だな、とスレイは内心で笑った。

アルスが次に紹介したのは、自らの娘でもある、姫勇者、カタリナ。父親と同じく王者の威風を纏^{まと}っている。

「じゃじゃ馬」と紹介されたカタリナはこめかみに青筋を浮かべていたが、場を弁^{わきま}え、どうにか怒りを抑えたようだ。

立ち上がり優雅に礼をした彼女は、しとやかに席に着いた。その過程で、何やら情熱的

な視線を向けられたスレイは、確かに過去に因縁はあるが……と眉を顰めた。

久しぶりに見たが、カタリナ王女はやはりこの場でも飛び抜けた美女の一人だ。標準的なハイエルフと同等の美貌だろう。しかも、ハイエルフには無いような圧倒的な色香を漂わせている。

人の上に立ち、人を率いるのが当然といった太陽のようなオーラは、父王から引き継いだものだろうか？

カタリナの武器は、スレイも以前にその目で確かめたことがあるハルバードである。

現在の技量は目を瞠る程ではないが、それは単純に経験不足故だろう。潜在的な才能やカリスマ性は、アルスをも超えているのではないか。探索者としては超一流といえる。

要するに、まだ戦闘相手として味方するには未成熟な原石というところだ。

加えて、これ程の美女ならば是非ともモノにしなければ、などと不謹慎なことも考えるスレイ。

続いて紹介されたのは、近衛隊副隊長の狂風。ジルドレイ・アステッド。

ジルドレイとは過去に剣を合わせたのでよく分かるのだが、この男、剣士としてはそこまででもなかった。

まあ、称号・勇者の本領は究極級のシークレットウエポンを唯一装備、使用できることなので、剣士の才が今いちなのは仕方が無い。

カタリナは別として、称号・勇者達の強みは、レベル99にまで達したその経験の豊かさだろう。ジルドレイも他のSS級相当探索者と比べて、かなり場数を踏んでいる方だ。

そんなことを考えていたスレイは、ふいに、称号・勇者達の身体に、とある種が仕掛けられていることに気付く。他のSS級相当探索者に対し、優位になる為のギミック……わざわざ研究させたのだろうか？

何にせよジルドレイに関しては、風剣ミストラルの力がどれ程のものかにかかっている。剣技に期待できない以上、楽しみはそこしかない。

次は、称号・勇者の闘仙、マグナス・スライカンド。落ち着いた風貌をした三十代に見える男で、スキンヘッドに黒い瞳が印象的である。

技量はそこそこだが、魔闘術を極めていようだ。術を用いる時はどんな姿になるのだろうか。

究極級のシークレットウエポン、神拳スバルタクスの力がどれ程のものか、やはりそこが評価の分かれ目になりそうだ。

そして同じく称号・勇者、マリア・フレイム。二十代後半に見える美女である。彼女は「火炎姫」という二つ名を持つ。

この二つ名の通り、髪や目は情熱的な赤色をしている。また、その扇情的な服装や表情も、全てがまるで炎のようだ。

これはまたそえられるな、とスレイは愉しげに笑い、やはり彼女もモノにしたいと思った。

マリアは火の属性に極端に偏るも、そこまでの強さは感じられない。

かつて得た特性「炎の精霊王の加護」について、彼女には隠しておくべきか……いや、それを餌にするのもいいか、などと考えてしまうスレイ。

マリアの究極級シークレットウェポンは炎杖カグツチ。見ただけで、圧倒的な炎の気配が感じられる。

「神殺し」の神の遺骸を素材にして、火神が創り上げた——という情報が脳裡に浮かんだが、スレイはそこから先を遮断した。折角の今後の楽しみを、危うく無駄にするところだったと苦笑いする。

ともかく、「炎の精霊王の加護」を持つ自分でも支配できない——というより、火の精霊達でさえ恐れて近付かない炎の力を確認した。今はこれで充分だろう。

次いで職業…勇者の三人、ヤン・ブレイブ、エミリー・ブレイザー、ライバン・クロステッドが揃って紹介される。

彼らは人間にとって対邪神の切り札と呼べるはずなのに、三人共、随分と簡素な紹介だった。しかも、彼らは何かを言おうとしてアルスに視線で制されていた。

軽い扱いに疑問を抱きはしたが、一人ひとりを見定める必要も無い相手だと判断し切っ

て捨てる。全員実力は二流。紅一点のエミリーにしても、美少女であることは確かだが、自分の程度を弁えていない感じが残念で、スレイの守備範囲外だ。

経験不足である上に称号…勇者のような仕掛けも無い。噂の封術とやらも、使い手がこれでは宝の持ち腐れではなからうか。

装備に関しても、三人のそれが類似している所為で、見縊ってしまう者も多いだろう。だがあの究極級シークレットウェポン、勇者シリーズにはかなりの力を感じる。見るだけでは細かいことまで分らないが、スレイの好奇心を刺激して止まない。

ただ、中身が伴っていないとは勿体無い、とスレイは溜息を吐いた。

「さて以上、私も含めて八名が我が国の代表と考えて貰って構わない。よろしく頼むよ」アルスはそう告げると、悠然と席に座った。

ゲツシュが再度立ち上がり、畏まってゴホンと咳払いをする。

それを他所に、スレイは相変わらず侍女を口説き続けていた。

いかにもガードの堅そうなこの侍女を「堕とす」ため、スレイは心理学を中心としたあらゆる知識を駆使している。その結果か、侍女の頬の赤みはやや増してきたようだ。

しかし、ここで下手を打てば全てが無駄になる、と気を引き締めるスレイ。

ちなみに、既にスレイの女となっている女性達の方は、決して見ないようにしている。

見なければ居ないのと同じことだと、スレイは自分に言い聞かせていた。

「それでは次に、シチリア王国とディラク島の方々、お願い致します」

「ふむ、私達から始めさせてもらっても構わないかな、ノブツナ殿？」

「ああ、順番なんか気にしちやいなえから構わねえぜ」

了承を取り付けて、灰色の短髪と碧眼を持つ、無表情な壮年の男が立ち上がる。

「それではまず私から。私はシチリア王国国王アイス・コルデリア。何故か分からないが氷王^{氷王}などと呼ばれているらしいな。よろしく頼む」

無表情のまま、淡々と告げるアイス。その表情は全くと言っていい程動かず、その視線は絶対零度の冷たさを感じさせる。

職業・勇者の三人などは、明らかに怯えているようだった。尤も、アイス自身は自分がそのような冷たい眼差しをしているという自覚は無いのだが。

そこで、これまで同様に加速するスレイ。

確かに能面のような表情だが、一見冷然とした瞳の奥に、確かな温かみが存在している。国王たるに相応しい器の大きさと深みも感じる。

何より彼が成した実績を思い起こせば、これが故国の国王かと深い感慨が湧いてくる。

スレイはどこか穏やかな気持ちになった。

次いで、シチリア王国の宮廷騎士団長と宮廷魔術師団長を兼任するフェンリル・ノースエッジ。腰まで届く灰色の髪と、同じく灰色の瞳を持った美女だ。

「魔狼^{魔狼} フェンリル……かつての師から話には聞いていたが、色んな意味で厄介な相手だ。国に仕官する気などさらさら無いスレイにとっては、フェンリルに目を付けられるのはやはり面倒臭い。

だが、と気を取り直してフェンリルの容姿を見やる。なるほど、二つ名に相応しくしなやかでシャープな肢体をしているが、胸は大きい。

こんな極上の女ならモノにしたいと思ってしまうのは男の業だ、とスレイはひとり考えた。

一方フェンリルの戦闘能力は、剣技と魔法を共に極めているが故に、どちらも突き抜けていない。ただ、それらを組み合わせた場合にどのような戦い方になるのかは未知数だった。

明らかに氷水魔法が得手^{得手}だろうが、どこか違和感——それだけではないような気もするのだ。

また乗騎^{乗騎}として、自らと同じ名を持つ、シチリア王国内の絶対凍土^{絶対凍土}に棲まう魔狼フェンリルを召喚するという。装備するシークレットウェポンは剣と杖、両方とも神話級だとスレイは見切った。

「以上、私を含めて二名が我が国の代表となる」

そしてアイスは席に着くと、ノブツナに告げる。

「それではノブツナ殿、続いて頼む」
「おう」

ノブツナは軽く返事をし、立ち上がった。

「俺はノブツナ・シユテン。鬼刃^{まじな}ノブツナなんて呼ばれてるな。そこガキみたいな形をしたクロウツて爺の息子で、一応ディラク島で最大の国の国主をやっている。ディラク島代表と考えて貰って構わねえ」

伝法^{くわんぽう}な口調の自己紹介に一部の者が眉を顰^{ひそ}める。

名指しされた父親のクロウなどは肩を竦^{こわ}めるだけだ。だがノブツナの隣に座る美少女は恥^{はにか}ずかしそうに俯^{うつむ}いていた。

期待通り……いや期待以上の男だとスレイは感嘆する。

紛れもなくその刀術の技量、経験はクロウと同等。だがクロウとは異質の刀術を使うであろうことは明白だ。何せ武器は、長大な究極級シークレットウエポンのディラク刀が一刀のみである。

降神刀フツノミタマというその刀は、剣神による正規^{せいぎ}の最高傑作^{けつさく}だとか。まあスレイにとっては、その名を耳にするだけで能力が分かってしまうのが残念だったが。

勇者で無いにも拘^{かか}わらず、究極^{くわくごく}級のシークレットウエポンを与えられたノブツナというイレギュラーな存在……いかにも喰^くいで^いのありそうな好敵手^{こうてきしゅ}じゃないか、と獯^{とうりゅう}猛^{もう}な笑みを

浮かべるスレイ。

続いてノブツナの娘、シズカ・シユテンが紹介される。ストレートの黒髪に黒い瞳、雪のように白い肌をした美少女だ。

「戦力にもならないのに付いてきた」と言うノブツナに対し、シズカは「父のお目付け役です」と反論する。ノブツナは渋い顔となり、場の笑いを誘った。

この寸劇のような一場面を見れば、シズカがいかに巧みに父親の手網^{たづな}を引いているかが分かる。そして彼女は、小太刀二刀流と方術^{ほうじゆつ}の心得があると告げた。

加速したスレイは改めてシズカを眺める。ディラク風の巫女装束^{みこしょうやく}を纏^{まと}った彼女は、神秘的で清楚な趣^{おもむ}きがある。

神秘的という点で共通しているマリーニアが大陸風なのに対し、シズカはディラク風と、二人は対照的だった。何にせよ、やはりモノにしたい。

先程からのワンパターンな思考に、思わず苦笑してしまふスレイ。

ノブツナに対する態度を見る限り、性格的にはかなり生真面目そうだ。探索者でない以上、現時点では戦闘相手^{あそびあいて}として不適格と結論づけた。

「まあ、俺達がディラク島の代表^{だいひょう}ってことで、よろしく頼むわ」

そう言ってノブツナは荒々しく席に座った。そんな父親をシズカが睨^{にら}む。

再度立ち上がるゲツシュ。

「それでは次に、兇竜帝国の方々、お願い致します」

「ふむ、それでは……私は皇帝、竜皇ドラグゼス・ドラグネス。当年とってまだ二百五歳の若造だが、よろしく頼むよ」

年齢感覚の違いを上手く使い、ユーモアを交えてそう告げたのは、黒髪黒瞳の壮年の男。竜皇だけあってその威厳は相当なものだ。一部の地域で神聖視されているだけのことはある。

探索者でない一般の人間ならば、二百五歳というのはとんでもなく高齢だが、竜人族ではまだまだ若造に過ぎない。

技量もそれなりに伴っているようだが、若さ故に、生来の力頼みというレベルから抜け切れていないようだ。

ただ竜化さえすれば、天狼と並ぶ程の強さだろう。その彼と戦えば、どの程度楽しめるだろうか……とスレイは期待する。

次いで第一皇女のイリナ。長い黒髪が煌めく美少女だ。

意志の強さを感じさせる黒い瞳に好戦的な色を宿し、スレイを見つめていた。スレイは軽く笑って受け流す。

「鬮竜皇女」——久しぶりに見るが、相変わらず「強さ」を具現化したような美だ。性格は面倒臭いが、それでもかなり魅力的だとスレイは思う。

だが戦闘者として見ると、今のスレイからすれば最早物足りない。彼女も生来の力任せで、技量が全く追いついていないのだ。

まあ彼女と戦った時のスレイ自身も、覚えていたのは剣の握り方と振り方ぐらいだった。型の一つも知らず、持ち前のスピードに任せた回避と、連撃の手数押しで引き分けに持ち込んだ一戦を思い出すスレイ。

たとえ彼女が竜化したとしても、この場に居る上位クラスの者相手には勝負にならないだろう。

続いてドラグゼスは第二皇女のイリナを紹介した。白髪に赤い瞳のアルビノの美少女だ。動作の一つ一つが上品で洗練されており、そのたおやかさは姉のイリナと似ても似つかない。

癒しの竜皇女、という二つ名に相応しいその包容力は、スレイの友人——アッシュ・グランダリアの恋人には勿体無い程だ。現に、クロスメリアのヤンが頬を赤く染め、情熱に満ちた瞳で彼女を見詰めていた。

一目惚れとは……ややこしい事態にスレイは頭痛を覚える。

ともあれ、儂けでありながら芯の強そうな彼女は確かに魅力的なのだが、スレイからすれば、恋人の居る女には興味が湧かなかった。

エリナが持つ治癒の力には、何やら特殊な秘密がありそうだが……まあ戦うことがない

なら今、識る^しのも問題無いだろう。そう考えたスレイは、彼女を強く、視た^ッ。なるほど。魂と肉体の不適合、どうやらこれが彼女に治癒の力を与え、更には竜化を不可能^しにしているらしい。

輪廻^ねの輪の奔流^{ほんりゅう}に解けきらなかった癒神^{ゆしん}イアンナの寵愛者^{ちゆうわいしや}——その魂が、彼女の魂の大部分を占めている。恐らく八十パーセント程か。

流石に神の寵愛者ともなれば魂が解けるのに時間がかかる。エリナの場合は、魂が解けきらぬ内に僅かばかり他の魂と混ざり、すぐに転生してしまったのだ。竜神によって創造された種族の肉体と癒神の寵愛を受けた魂では、その間にズレが生じて当然だろう。

だが興味は湧かない。もしエリナに何かあれば恋人のアッシュが対処するだろうし、自分^ははアッシュから頼まれた時に手を貸してやればいい。

「以上三人が、我が兇竜帝国の代表となる」
席に着くドラグゼスと立ち上がるゲツシュ。

「続いて、フレスベルド商業都市国家の方々、ご紹介をお願いいたします」

ゲツシュが言い終わると同時に軽快に起立したのは、赤い髪をした明るい男だった。

「どうも、はじめまして。フレスベルドの議会で議長を務めさせてもらっているカイト・ギルスだ。一応S級相当探索者でもある。商王^{しょうおう}などという二つ名でも呼ばれているね、よろしく頼むよ」

ウインクまでして見せた男の裏側にある黒い部分を感じ取り、スレイは警戒心を抱く。先程、カイトが背負っているダマスカスの弓を見て、スレイはまず、ライナのことを思い出した。瞳の奥に潜む狡猾^{ひそこづかっ}さにも、ライナと同じ臭いを感じてしまう。

ライナは裏の世界の住人とはいえ、表でも広く名前を知られている。その結果、暗躍するにしてもたかが知れていた。

それに対しこのカイトという男は、政争から謀略まで、その戦術、戦略レベルに於いて危険なまでの手腕を発揮するだろう。しかも相当がめつそうである……ディザスターやフールを見る目付きが、完全に売り物を見るそれだった。

スレイにとっては楽しい戦闘相手^{あそびあひ}ではなく、いかにも面倒臭い奴という印象しかない。ただ一点、彼は迷宮の遺物の研究について、迷宮都市を擁^{よう}するクロスメリアを超えている可能性があることは評価できよう。カイトの性質に気付き、スレイはそう考えた。

カイトの次は、娘のアリサだ。父と同じ赤髪をポニーテールにしている。

この美少女も狡猾そうではあったが、カイトやライナのような陰の気は全く無かった。先程は少々挑発してやろうとそのスレンダーな胸に同情の視線を向けたのだが……胸はともかく、その見目麗しさは中々の物だ。男達を惹き付けて止むまい。

ただし、自分の女とするかどうかを決めるのはまだ早い。傍にいるダリウスという剣士との関係が読めないからだ。

じゃじゃ馬と言われたアリサが、ハリセンでカイトの頭を叩く、という皆の笑いを誘う一幕があった後、カイトの私兵にしてSS級相当探索者のダリウスが紹介された。

「どこか人生に疲れたような表情をしているが、隙一つ無い。」

「閃光」と呼ばれる彼に、加速したスレイは驚嘆していた。ダリウスはSS級相当探索者の中でも有名な方では無い。しかしどうだ、探索者としても剣士としても超一流ではないか。大陸の純粹な剣を扱う者の中でこれだけの使い手など、スレイは他に知らない。

アルス、クロウ、ノブツナ、ダリウス……彼ら四人は紛れもなく天才である。同時に、エミリアの祖父であるエルフ、ジンの姿が思い浮かんだ。彼も忘れてはいけない。

かつてジンと戦った時、スレイは柄にも無く漢の浪漫に興奮してしまったが、冷静に考えると良く分かる。刀剣と魔法——分野こそ違うが、ジンは間違い無くこの四人に匹敵する。

技量は僅かに劣っているかもしれないが、一番の天才を選ぶならば、確実にジン一択だ。天才の本質とは才能だけではない。

閃き——即ち劇的な発想が無ければ、真の意味で天才の壁は越えられない。その点、系統樹を下リルにするとといった常軌を逸した発想——あれこそが真の天才である証といえるだろう。

……少しばかり脱線してしまったが、何やら不幸オーラを漂わせているこのダリウスも、

興味深い好敵手だな、とスレイはほくそ笑んだ。

さて、アリサとこいつの仲はどうなるんだろうか。今のところは家族のように親しくしているが、そこに恋愛感情が混ざるかどうか……今はどちらにでも転びそうな按配だ。やはり暫く様子を見るか。

その後、カイトがダリウスのことを「暴走する自分と娘のお目付け役」などと評すると、怒り心頭のダリウスは、「分かっているなら改めろ！」と主人を怒鳴りつけた。

心温まるコントを見せつけられ、場に緩んだ空気が漂うが、実はそれすらカイトが意識して作り出したものである。スレイとしては警戒を解けない相手だった。

「まあこの三名が、フレスベルドの代表と考えてくれ。よろしく頼むよ」
 またもウインクしながら軽快に席に座るカイト。

慌ててゲツシユが立ち上がり、続きを促す。

「それでは続いて、聖王殿下とお付きの方々、お願いいたします」

「どうもはじめまして、わたくしヴァレリアント聖王国の王と、ヴァレリア教の最高司祭を兼任しております、イリュアと申します。よろしくお願いたしますね」

眩いばかりの黄金色の髪と瞳を持つ、絶世の美少女が口を開いた。

軽く礼をしただけで、その豊かな胸が揺れた。思わず眼を奪われる男性陣。

すると、イリュアの隣に座っていた金髪碧眼の男が険しい眼差しで周囲を見回し、大き

く咳払いをする。

「聖王、イリュア——神々しい光の如きオーラを放ち、カタリナに匹敵する美しさだ。何より、大きな司祭服さえ押し上げる豊かな胸と、清純なイメージの顔立ちとのギャップが大きく、実に扇情的だ。男達が目を奪われたのも仕方の無いことだろう……無論スレイも含めて。」

これだけ良い女は是非ともモノにしたい。特にあの胸など……そんな暴走しかけた思考をどうにか止め、加速を解除し通常時間に回帰するスレイだった。

世界が動き出すと、イリュアは仕方無さそうな顔で、隣に座る男を眺めた。

イリュアはその男、自らの兄であり護衛でもある「聖剣」ヴァリアスを紹介する。

見た限り、探索者としては超一流、しかし剣士としては一段劣るといったところだ。

ただ、聖王の守護者のみが受け継ぐという聖剣技には興味をそえられる。五つの剣理を越えた超剣技だというのだから、それは見逃せまい。

だが……と、スレイは彼をじつと見据えた。

あれはシスコンだ、どうしようもなくシスコンだ、紛れも無いシスコンだ、超シスコンだ。聖剣シスコンなどと呼びたいところだが、流石にそれは自重しよう。

「ここからは、中央の都市国家群で活躍されているSS級相当探索者の紹介になります。今回はわたくしに付いて来てくださいましたので、わたくしから紹介させて頂きますね。」

まずは、SS級相当探索者の中でも、クロウ様達が復帰されるまで最古参として名高かつた、「拳聖、オウル様」

イリュアに呼ばれたのは、まだ壮年にしか見えない茶髪茶瞳の男だった。

ほう、と感心するスレイ。

この男の闘術はかなりの領域に達している。クロウと同じく、経てきた経験の量が膨大なのだ。

まず間違い無く、「魔闘術」も極めているだろう。

それと、あのシークレットウェポンのセスタスは、実に面白い特徴を持っているそうだ。想像通り応用性に優れているなら、オウルの経験を活かせばどれ程の武器になることか。

次にイリュアが紹介したのは、知者として知られる「賢者」アロウン。無造作に長く伸ばした茶髪の男だ。

その二つ名に相応しく、アロウンは知性に富んだ目をしている。

その姿は、どこかシエルノートの分体を思い起こさせた。まああれ程邪悪でもないし突き抜けてもいないが、一度ゆっくり語り合ってみたいものだ。

特に彼がかけている魔導科学製の眼鏡などは、かなり知識欲を刺激される。時間魔法を使い、迷宮に於いて過去の遺物を研究するのがライフワークだと聞いているので、眼鏡もその産物かもしれない。

迷宮に潜る以上戦いの経験も豊富そうだが、自ら望んで強敵と戦うタイプではないだろう。そもそも、彼のように時間魔法に特化した魔術師というのは極めて珍しい。となることや、戦闘相手としては不適合か。スレイはそう判断した。

次いで、傭兵国家グラスベルの国王、傭兵王、グラナル——黒いざんばら髪に無精髭を生やした男だ。粗野ではあるが野卑ではない、そんな印象を受ける。

この男、野望を持つという一点ではスレイと似ている。だが比較にならない程器が小さく、相手にはならない。

戦うにしても、一対一の決闘よりも戦場で兵を率いることに向いているのだろう。

まあそれならそれで、彼が率いる一軍全てと戦っても構わないのだが……下手をすると無抵抗の者達をスレイが蹂躪する事態になりかねない。

戦いに付いて来られるような精兵を、彼が多数抱えていればいいのだが。

次に紹介された、英雄。ブレイズは、グラナルの天敵といった感じだった。金髪碧眼の爽やかで正義感溢れる表情をした男である。

悪しき野望を阻む為に居るような男で、だからこそ英雄などと呼ばれるのだろう。ただ、スレイとは反発しあうような気配が無い。

まあ俺の野望はあまりに馬鹿げていて、世間的にはアホらしいとか言われる類のものだからな。恐らくブレイズも、俺の野望を聞けば困ったように苦笑するだけだろう、とスレ

イは思った。

戦闘力でいえば、このブレイズもグラナルと似たようなものだ。対極にして相似とは、また良く出来ている。

最後に紹介されたミネアは、イリュアが紹介したメンバーの中で唯一の女性である。

何処かしら陰を感じさせる絶世の美女。毒蜂、或いは毒蜘蛛。

そんな二つ名を持つ彼女は、カタリナ、イリュアと並ぶ美貌の持ち主だ。だがそれは陰性の美貌で、まさにカタリナと対極にある。

絶対に自分の女にしたいと思うと同時に、それ以上にスレイの頭を占めていたのは、彼女との戦闘だった。

かつて「大陸最大の闇」と呼ばれた巨大暗殺組織をたった一人で潰した少女、それがミネアなのである。

その組織にはオリハルコンの操糸術という、異常な戦闘術を開発した女がいた。

彼女は史上初めて「念操絃者」の称号を得た、いや生み出したのだが、その女こそミネアの師であった。

ただ一人その技を受け継いだミネアだったが、組織は何を思ったか、彼女をとある実験の被検体を選んだ。強力な毒モンスターを大量に使って、新しい蟲毒の法を編み出そうとしたのである。